能おおしま革紙

第22号

(年2回発行)

発行所
喜多流大島能楽堂
〒720-0814
広島県福山市光南町2-2-2
TEL 084-923-2633

P.2 鼎談　それぞれの「道成寺」　飯田清一　亀井広忠　大島輝久
P.6 道筋　三王清
P.8 先人の遺しもの　大島泰子

祖父　大島久見七回忌に

喜多流職分　大島輝久

この度、大島久見七回忌追善能として「道成寺」を舞う事になりました。生前、祖父は驚異的と言っていいくらい元気な人でしたから、祖父の七回忌に自分の「道成寺」を手向ける事になろうとは夢にも思いませんでした。

『回数を掛けて稽古しなさい。
　そうすれば意味のない所が意味を持ってくる。』

最も印象に残っている祖父の言葉です。十六年前、私が本格的な修業の為に上京する直前になって突然、祖父が芸談らしき事を話し始めました。それまでは言っても分からないだろうと思って言わずにいたのでしょうが、これだけは伝えておかねばとの思いで聞かせてくれたのでしょう。当時は「ハァ、そんなものかなー?」とたいして気にも止めていませんでしたが、その言葉を噛み締める時が今まさにやってきました。

能楽師にとって「道成寺」は特別な曲です。

能楽修業の卒業試験に例えられる事も多く、私も駆け出しの頃から漠然とではありながらこの曲を意識して日々を送ってきました。見所(みどころ)の多い「道成寺」の中でも殊に重要視される乱拍子と呼ばれる舞があります。三十分以上も続く小鼓方との一騎打ち。強く鋭い掛け声に誘われ足先のみを動かす特殊な舞で、まさに祖父の言葉通りの無から有を生み出す能ならではの表現方法です。乱拍子によって溜まったエネルギーが一気に爆発したかのような急ノ舞。それに引き続く命を懸けた鐘入りと、「道成寺」はその全てが破格の構成で成り立つ大曲です。

その様な曲を舞える喜び、これまで育て支えて下さった方々への感謝。そして、この道に導いてくれた祖父への想いを込めて十月三十一日、「道成寺」を舞わせて頂きます。

鼎談 それぞれの「道成寺」

幸流小鼓方　飯田清一
葛野流大鼓方　亀井広忠
喜多流シテ方　大島輝久

道成寺はシテのみならず舞台上で携わる全ての役者にとって大役です。その中でも特にシテと密接に係わるのが大鼓、小鼓。

私の披きにあたってその大役を快く引き受けて下さった大鼓方　亀井広忠さん、小鼓方　飯田清一さん。

お二人は全ての曲目の中で最も特別視される道成寺をどう捉えているのか、その熱き想いをお聞きしました。（輝久）

飯田清一（いいだ せいいち）氏

幸流小鼓方職分。
1960年生まれ。
10歳で人間国宝の故・幸宣佳に入門。
12歳、囃子・桜川で初舞台。
石橋、乱、卒塔婆小町など大曲を次々披き、28歳で道成寺を披き独立。毎年、米国・欧州公演に参加、本年は上海万博公演を勤める。新作、復曲も数多く手掛け、昨年は、新作能（直江兼継）の作調に参加。久留米市芸術奨励賞受賞。2000年に重要無形文化財総合指定保持者認定。
（社）能楽協会会員。
日本能楽会会員、一の会会主。

●それぞれの道成寺披き

亀井　いよいよ迫って来ましたね、あなたの道成寺が。

輝久　いやぁそうですね。普段、能を舞う時は二、三ヶ月掛けて稽古するんですが今回は一年半くらい前から始めたので、いつもと曲に向かうサイクルが違って何か妙な感じがしてきているのですが。お囃子方はシテと違って番数が多いですから、あまりその曲だけを長く稽古するという事は少ないんじゃないですか？

亀井　そうなんです。でも私も道成寺の披きの時は特別な思いがあって、一年くらい掛けて稽古しましたよ。

飯田　政允先生の披きの時、輝久さんは幾つでしたか？

輝久　父の道成寺は私が生まれる前で、昭和四六年福山の舞台披きの時でした。

亀井　以前その時の写真を大島家で拝見したら、うちの父と叔父の俊一が大小を打っているんですよね。

飯田　今回、俊一先生が私の後見をして下さいますから、約四〇年経ってその時のお二人が後見をして下さるんですね。

輝久　ホント偶然にもそうなりましたね！　私はもちろん今回が初演ですけど、ちなみに広忠さん、道成寺は何度目ですか？

亀井　今回で三八回目になります。

飯田　ハァー、広忠さんは今お幾つ？

亀井　三五です。

輝久　年齢より打ってますね（笑）。凄い！

飯田　私は十一度目です。最近機会に恵まれて流儀の中では多い方だと思いますが。でも、シテが披きというのは実は今回が初めてなんですよ。

輝久　えっ、そうなんですか。それは光栄です。

亀井　私が披いた時には、おシテも大小の二人

も披きだったんです。シテは観世流の浦田保親さんで小鼓が曽和尚靖さん。尚靖さんが二一で私がちょうど二〇の時でした。

輝久　若い！　それは凄い企画ですね。

亀井　京都の曽和さんの会でした。今思えば恐ろしい事をやったなと思うんだけど、その時は「よし、やってやるぞ！」という気持ちが強かったですね。

輝久　飯田さんが披きの時は友枝昭世先生がおシテでしたよね？

飯田　そうです。幸宣佳先生の十三回忌追善の会で。昭和六三年ですから二二年前になりますね。二八の時でした。あの時私は二年間、お酒を一滴も呑まなかったんですよ。身体もかなり絞って。ただやり過ぎたのか当日はなかなか思うように力が入らなかった（笑）。三回目以降から取り組む姿勢を考え直して、稽古は今まで以上にするけれど、飲食制限はせずにいつも通りの生活をしようと。そうしてから逆に沢山お役を頂くようになりました。

亀井　私は今までに一年間で最高七回打った事もあるんですが、道成寺は何度打ってもその都度新鮮な気持ちになれるし、またそうならないと打てないんですよ。舞台上の全員が「このシテの為に」と心を一つにする曲は道成寺以上の物はないと思いますよ。

亀井広忠（かめい ひろただ）氏

葛野流大鼓方。
1974年東京生まれ。
葛野流大鼓方宗家預り亀井忠雄を父に、歌舞伎囃子方田中佐太郎（12世田中流家元）を母にもつ。父に師事。
1981年「羽衣」で初舞台。1997年弟の13世田中傳左衛門（歌舞伎囃子田中流家元）、田中傳次郎と共に「三響会」を、2002年「広忠の会」を発足した。2003年第８回ビクター伝統文化振興財団賞「奨励賞」受賞。国立能楽堂養成研修所講師。

●習次第について

輝久　少し曲を追って細部の事を伺いたいんですが、まずシテが出る時の習次第と云われる出囃子が非常に特殊ですよね。

飯田　道成寺は色々と大事な事が多いんですが、私は師匠から最初に教わったのは「一番大事なのは次第だ。次第が打てないようなら道成寺は打つべきではない。」と習ったんですよ。

輝久　普通の次第は割とリズムは一定ですけど、道成寺の次第は位が進んだり緩まったりしますよね。何かイメージしているものはあるんですか？

亀井　いつもイメージしているのは満開の桜です。そこにパッと風が吹いて、ここで位が進む。そして風がおさまり花びらが吹き散った所に一人の女が立っていた……。シテの幕離れにはそんなイメージを持っています。それを我々囃子方は間、掛け声というもので表そうとするんです。間、声を生み出すものは息。あの長丁場の次第の間、グッと息を詰めてますから非常に苦しい。苦しいんだけど、次第で身体の内部に負荷をかけておく事でその後が楽に打てるようになるんですね。これは何度も道成寺を経験する事によって分かってきた事ですが。

飯田　私は次第を通して、何か得体の知れない物といった雰囲気を出せればと思っています。それは何なんだ？と言われれば女の情念を凝縮したような物といった事になるのでしょうけれど、最初に得体の知れない雰囲気を作る事でその後の大鼓物着一調や乱拍子といったものに意味が出てくるように思います。

大島輝久（おおしま てるひさ）氏

シテ方喜多流職分。
（社）能楽協会会員。
1976年福山生まれ。
３才、仕舞「猩々」で初舞台。
祖父久見、父政允に師事。
1994年喜多流内弟子入門、塩津哲生師に師事。
海外公演にも多数回参加。
2003年９月、「猩々乱」を披く。
能大島家５代目。

●乱拍子とは何か？

輝久　さて、一曲の中心となる乱拍子ですが。大変初歩的な質問で恐縮ですが、あれは何を表現しようとしているんでしょうか？　非常に長いコミを取って突如、強烈な掛け声を掛ける。それが三〇分以上も続くんですが。

飯田　実は私も幼い頃、師匠に同じ質問をした事がありまして。そうしたら「蛇の脱皮を見ろ」って言われたんです。見た事あります？

輝久　いえいえ、ないです。

飯田　蛇は脱皮する時、長い間ジッとしているんです。そしてグッと力を溜めて皮が剥ける瞬間ズズッと動く。それが速いんです。そしてまたグッと力を溜めてズズッと動く。これを繰り返すんです。今ではもう見なくなりましたが、昔の旧家でアオダイショウとかが住み着いていて脱皮した後の皮が残っていたという事があるんですが、そういう家で夜中にズズッという音がした時は蛇が脱皮している時なんですよ。

輝久　へぇー。

亀井　面白いなぁ、その話し。

輝久　思わず唸っちゃいますね。

飯田　蛇というのは脱皮の時だけじゃなくて例えば獲物を捕る時でもジッとして気を溜めていると、細長い胴体が膨らんでくるんです。そして瞬間的に動いて獲物を捕る。時にツチノコが宙に浮いているのを見た！って話しがありますけど、あれはまさに蛇の事で気を溜めている瞬間を見たんじゃないですか。そして急に動くから宙に浮いているように見えたんですよ。だから乱拍子の間というのは非常に長いですけれど、ダラダラしたものではないんですね。身体の外部は静止しているけど内部は物凄く動いている。さらに言えば道成寺のシテにとって獲物は男でしょ、私は乱拍子って何かそういう物を表現しているんじゃないかと思うんです。

●急ノ舞から鐘入り

輝久　乱拍子の後はいよいよ急ノ舞ですね。

亀井　大鼓の私が道成寺で一番キツイと思うのは実は乱拍子の間なんです。打ってはいないけど小鼓と一緒になって息を詰めている。他の流儀では床几から下りて待っている所もあるんですが、うちの流儀は掛けたまま、あのヒンズースクワットしてるみたいな状態でキチッと舞台の絵になっていないといけない。これは苦しいですよぉ。でも小鼓と一緒に息を詰めている事によって急ノ舞で出遅れない。気とスピードが出遅れないんです。

飯田　こちらもキツイですよ。やっと乱拍子が終わったと思った途端、満を持して待っていた笛と大鼓が襲い掛かってきますから（笑）。全く気が抜けない。

輝久　道成寺の急ノ舞の勢いというのは凄いですよね。

亀井　他流では乱拍子で疲れている小鼓のペースを乱さないように急ノ舞を囃すという教えもあるらしいのですが、うちの家の教えは違います。「はい、これまでお疲れさん。ここからは俺に任せろ！」という考え方。だから絶対に乗り遅れてはいけない。

飯田　急ノ舞の入りというのは非常にデリケートで難しい所なんですけど、広忠さんは他の人とは違うんですよ。これはやった事のある人間にしか分からないかもしれませんが。

「俺に任せろ」じゃないけど、何か誘われると言うか、これなら絶対に外れないという感覚があるんです。幸流と葛野流の手組の相性の良さというのもあるんだと思うんですが。

亀井　ありがとうございます。

飯田　でもそんな事言いながらも急ノ舞が始まると、こちらはシテの鐘入りの心配をしだすんですよねぇ。

亀井　そうそう。

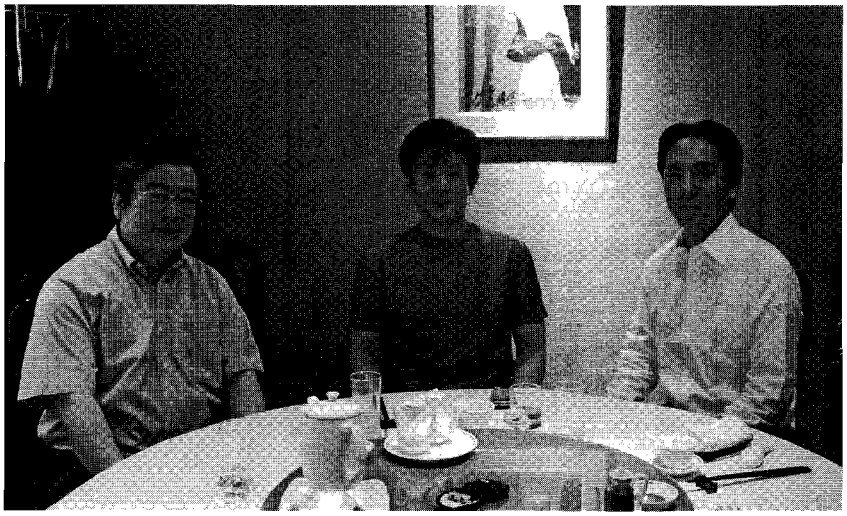
飯田　急ノ舞になるとそれまで亀みたいにジッとしていた鐘後見の方々が突如動き出すでしょ。あれで一気に鐘入りへの緊張感が高まるんですよね。

亀井　また我々大小の目の前で鐘に飛び込むでしょ。だから「無事に入ってくれよ！」と。

飯田　もう祈ってますよね。

亀井　そう、毎回打ちながら祈ってる。

輝久　そうなんですね。でもシテとしては鐘入りは一瞬の偶然性が働くし、本当に飛び込むのは危険なので稽古では出来ない所なんですよ。本番では鐘後見の塩津先生を信じて跳ぶだけです。さて、どうなりますか。



●道成寺を勤めるという事

輝久　道成寺を披く事が決まってから師匠はもちろん普段あまり芸の話しをなさらない先輩方まで、色んな方が様々なアドバイスをくださいました。「あそこはこうした方が良い。」とか「ここには気をつけろ。」とかいう具合に。それだけ皆さん道成寺に関しては強い思い入れがあって、大切に演じて来られたんだなぁという当たり前の事を最近ひしひしと感じています。

飯田　私は地方にいるという事もあって芸の事を教えて下さる先生というのは少ないんですが、最近、東京で道成寺のお役を頂く事が増えてきた時にお後見を様々な先生にお願いする事があるんですね。そうするとその先生方がその都度本当にありがたい教えをくださるんです。次第や乱拍子の事だけじゃなく、もっと根本的な音、掛け声、間合いの事などを。それぞれおっしゃる事は違うんですけど、時には「えっ、こんな事まで教わっていいのかな?」と思うような事まで教えて下さる事があります。ですから私は道成寺を打たせて頂く度に成長させてもらってきたという思いが強くて。これは本当に有り難い事だと思います。ただ「普段ももっと教えてくれよ。」と思う時もあるんですが(笑)。

輝久　広忠さんは忠雄先生という道成寺を絶対的に得意としていらっしゃる方が身近におられるので、それはそれで大変ですよね。

亀井　いや、これはね毎回凄いプレッシャーですよ。回りの皆さん、お客様も含めてみんな父の道成寺を知っているでしょ。まだ現役バリバリですし。それは凄いプレッシャーです。でもだからこそ、日程が合えば父に毎回後見をしてもらいたい。そのプレッシャーの中でやらないと自分自身の成長はないと思うから。

　私が道成寺で一番好きな所は最後に蛇体となったシテが幕に飛び込んだ直後、地謡が「望みたりぬと験者達は、我が本坊にぞ帰りける」と謡う所なんです。蛇体を祈り伏せる大仕事を終えたお坊さんが「まだまだ帰って修業だ。」と言ってる訳でしょ。披きの時にこの謡が聞こえてきて「そうだ、俺はこれからだ、ここから始まるんだ。」と打ち終わる時に強く思ったんですね。これってまさに能楽師の修業そのものでしょ。私にとって道成寺はそういう事を感じさせてくれる曲なんです。だから毎回新鮮な気持ちでいられるんだと思います。

輝久　今日は本当に貴重なお話しをありがとうございました。お二人のお話しを胸に当日は精一杯勤めさせて頂きます。どうぞよろしくお願い致します。

道筋

葛野流大鼓方
三王　清

能楽の世界に身を置き早四十年、今だに無我夢中、五里霧中の状況である。

思い起こせば、学生時代、スポーツはサッカー、音楽はカントリーウエスタン一筋であり、文学・美術などの芸術と呼ばれるものには一切興味を持たず、言わんや能楽をやであった。それが幸か不幸か、父親である三王禮夫の荷物持ち、皮締めを手伝っていた長男が県外の大学へ進学する事になってから、私が十六才高校生の時であったが私にお鉢が回って来た。当時は自家用車、もちろん運転免許証も無く、もっぱら父親の御弟子であった五島一さんの車に便乗させてもらい、現地に赴き、与えられた務めのみ果たしていたが相変わらず一向に興味が湧かず、父親の舞台を見る事も無く、唯呆然と明かし暮らすばかりであった。今にして思えば、大層もったいない事をしたものである。しかし、時が過ぎるにつれ、これも自分の意志に相反し、徐々に能楽という未知の世界へ引き込まれて行った。と言うのは、広島市には太鼓、大鼓、小鼓、笛の囃子会ほか、金春流を除く四流の舞囃子会が数多くあり、その各々主催されていた先生方が、皮締め以外何も出来ない私を哀れに思われたのか、次々と舞台へ出る機会を与えて下さった。

三王（さんのう）　清（きよし）氏

葛野流大鼓方。
1952年生まれ。
父の三王禮夫師、瀬尾乃武師、亀井忠雄師に師事。
(社)日本能楽協会会員。
日本能楽会会員。
国重要無形文化財総合指定。

私も無理とは思いながら、その御好意を断る勇気も無く、言われるまま舞台を勤めたが、もとより謡、笛などの基礎知識が無かったため、冷汗の連続であった。失敗迷惑数知らずにも拘わらず辛抱強く私に機会を与えて下さった諸先生の存在により、今の自分が有る事に感謝すると共に、能楽の世界も芸を磨くほか、後継者の育成と言う重要な義務が有る事を現在、痛感している。舞台を勤める時は常に恩返しの気持を忘れない様にしている。

この世界には、玄人、素人と言うはっきりとした一線が有り、私が玄人として歩んで行く道にある事を意識したのは、二十才の頃だったと思うが、喜多流シテ方の粟谷菊生先生と幸流小鼓方の横山晴明先生の御取り計らいで、喜多流「経政」を人間国宝の幸宜佳先生と勤めさせて頂く事になり、その許しを戴くため、父親と共に上京し、瀬尾乃武先生に乱の稽古を受けた時である。分不相応、時期尚早では有ったが、瀬尾先生の表情の中に、『貴重な経験だから、頑張ってみなさい。』との言葉を見い出した時、もちろん自分勝手な想像であったが、大きな勇気を頂戴した気持になり、舞台を勤める決心がついた。

数年後、瀬尾先生の舞台を拝見した後の食事の席で、この世界は好きにならないと続けて行けないと言われた事を思い出す。大鼓方は体力的にも精神力的にも忍耐が必要であるとおっしゃりたかったのであろう。今私も実感している所である。瀬尾先生亡き後は亀井忠雄先生に師事し、熱意有る稽古に、葛野流としての責任を感じている。

大島家とは過去福山において、能の舞台に幾度となく出勤させて頂き、昨今は、子供さんに能を紹介する場に参加させて頂き、笛方の吉岡望さん、小鼓方の横山幸彦さんと共に行動する事が一つの楽しみとなっている。

今までは、回りの人々の御好意による道筋を歩み、幸せな人生であったが、今後は人のため何が出来るかを考え、実行する番である。

能「絃上」　大島政允　大鼓 三王禮夫　小鼓 増田福太郎　大島能楽堂（1978.9.17）

先人の遺しもの

大島泰子

「・・・予ニ運アラバ・・・厳父ノ意思ヲ継ギ此ノ能楽ヲ無限ノ子孫ニ傳ヘタキモノナリ」

これは祖父・大島寿太郎が古い和綴じ帳に書き遺した言葉です。そこには大島家の先祖のことや演能記録、稽古日誌等が細かな毛筆で丁寧に書いてあり、ぎっしりと書かれた行間から能への熱き志と家族への温かい愛情が伝わってきます。その和綴じ帳は私が大島家に嫁いで間もない頃、久見父が見せてくれた大島家の宝物です。

大島寿太郎は明治四年に生まれ、幼少から厳父・七太郎より能楽の手ほどきを受け、教職に就きながらも長期休みには東京に上り、喜多宗家で能の修業を積み、能楽普及に努めていました。しかし、十四世宗家喜多六平太師に懇望され、明治四十四年樹徳尋常小学校の初代校長の職を辞して、能の道一筋に進むこととなりました。

武士には城があるように、能楽師には能舞台がいると大正三年、自宅のあった現在地より福山駅に近い新馬場町に借地して能舞台を建て、本格的に演能普及活動を始めたのです。子どもが四男四女八人いましたので、安定した教職を辞しての生活はかなり大変だったようですが、演能するための装束や諸々のものを次々と調達し、能楽普及活動に東奔西走したようです。遠くは鹿児島、徳島、大阪、仙台にも出かけた事が記録されています。

地元に題材をとった能「鞆浦」を創作し、大正六年に自身でシテを勤め、大正九年には十四世喜多宗家を招聘して大島能舞台で道成寺披能を催し、「見物人五、六百人未曾有の大成功、費用豫算二千百七十七円」と記しています。

大正十四年には故羽田惣右衛門先生五十回忌と「望月」の披能とを兼ねて催し、「海人」シテ　梅津正保、「景清」シテ　喜多六平太師　ツレ　伊藤千六、「望月」シテ　寿太郎　子方　大島久見の記録があります。

和綴じ帳は、朝鮮京城に嫁がせた長女君枝が大正十五年六月十七日、二十二才、初産で亡くなった深い悲しみの記録と共に「十二月二十五日、午前一時二十五分、大正天皇崩御、昭和と改元セラル」で絶筆。

その後、祖父大島寿太郎は昭和二年、「正尊」のシテを勤め、昭和三年には大島七太郎十七回忌追善能を催し、昭和四年五月には呉で「百萬」のシテを勤めています。

しかし、その年の九月二十一日に志半ば享年五十九才で没したのです。その時、長男厚民（大島政允の実父）は大学生、三男久見は中学生、末子幸枝は七才でしたので、祖母エイは途方に暮れて自宅周辺の田畑を売って生活費、教育費にあてたと伝え聞いています。

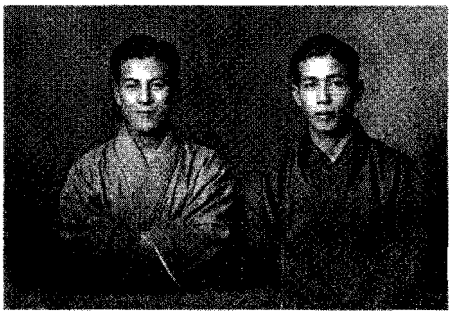
長男厚民は大学卒業後教職に就き、三男久見が誠之館中学校卒業後、十四世宗家に内弟子入

大島七太郎25回忌 寿太郎7回忌法要（昭和10.9.22）
幸枝（15才）光枝（23才）久見（21才）安登（28才）和人（18才）
厚民（30才）　エイ（54才）　圭一郎　福田トヨノ

門しましたので、大島家は七太郎、寿太郎、久見の三代が十四世宗家に師事しました。戦後間もなく久見父も度々、十四世宗家をお招きして催しをしていますので、家のアルバムには鞆の浦や尾道の海でのんびりと釣りを楽しまれている十四世宗家のめずらしい写真も残っています。

久見父は昭和二十四年には現在地に能舞台を建て、昭和三十三年には年四、五回の定期公演（能楽教室）を始めました。その後、昭和四十六年に三階建ての鉄筋コンクリートの中に能楽堂を建て、数々の大曲も秘曲も披きました。

「生まれた時から家にあった能舞台が福山空襲で焼けてしまいましたので、自分の城がいると思い、こんなもの（能楽堂）を建ててしまいましたが、これからの若い人はどうするでしょうね。」久見父がテレビの取材にこんな事を言っていましたが、当時の私にはその言葉の重みが理解できませんでした。久見父と里の父（吉田重夫）が誠之館中学校時代からの親友、里の父母も姉妹五人も大島へ稽古に通っていて、能楽堂を個人で持ち、定期能をするのはどこの能楽師も当たり前にしている事と思っていたのです。



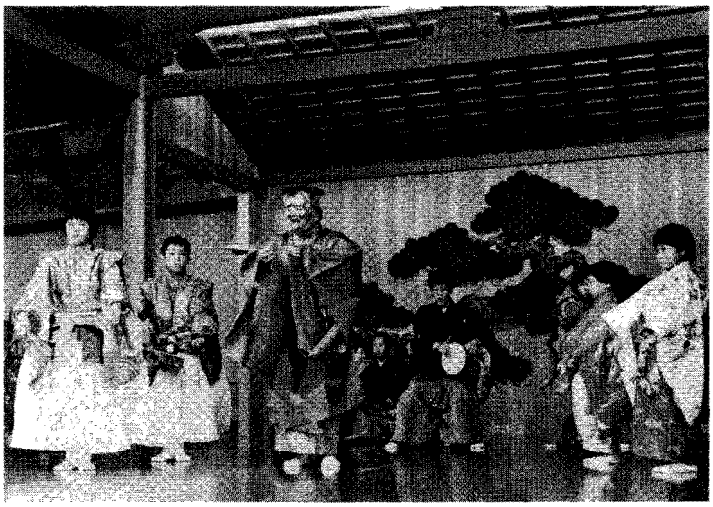
吉田重夫（23才）　大島久見（21才）（昭和10.6）

関西・東京から共演者を迎え、福山のような小都市で質の高い演能を続ける事がどれだけ大変なことなのか久見父の偉大さが身に滲みる昨今、私達はあの時の久見父の言葉に今後どのような回答を出せるのでしょうか。

しかし、こんなもの（能舞台）があったればこそ、衣恵・輝久・文恵・紀恵の四人はお陰さまで何とか無事に育ちました。自宅の階段を登ればそこが能舞台という環境、次々計画される催しの子方、仕舞や能の稽古を毎日毎日つけてもらったおかげです。

衣恵が小学六年生、輝久が五年生、文恵が三年生、紀恵が幼稚園の昭和六十一年九月の定期公演で「唐船」の子方を四人が勤めました。八月の暑い日々、稽古を受ける子供達も辛かったでしょうが、それを鍛える久見父の辛抱と体力には脱帽。

「能楽ヲ無限ノ子孫二傳ヘタキモノナリ」祖父寿太郎の執念が父久見に宿っていたのでしょう。



能「唐船」大島久見　子方 衣恵　輝久　紀恵　文恵　大島能楽堂（1986.9.21）

当日楽屋で、「唐船」のシテの装束を着けて下さる大阪の和島富太郎先生の一言、「大ちゃんが羨ましいな。」孫四人と一緒に舞台に立つ久見父がどんなにか幸せに見えたのでしょう。

久見父が亡くなって今年で七回忌を迎えます。大島久見追善能としてこの秋、輝久は「道成寺」を披かせて頂くことになりました。東京に出ましして後、友枝先生、塩津先生を始め流儀の諸先輩、三役の方々、そして多くの方々に大変お世話になりました。今後とも、末永くご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

大島泰子（おおしまやすこ）
1945年福山生まれ。慶応義塾大学文学部図書館学科卒業。
学習研究社児童図書編集部に編集者として3年半勤務。
能楽師大島政允と結婚。
能おおしま草紙編集。
能を主とした催しや邦楽劇「草戸千軒絵巻」などプロデュース。

喜多流大島能楽堂　定期公演

撮影 久保博義

能「源氏供養」大島衣恵 (2010.6.20)

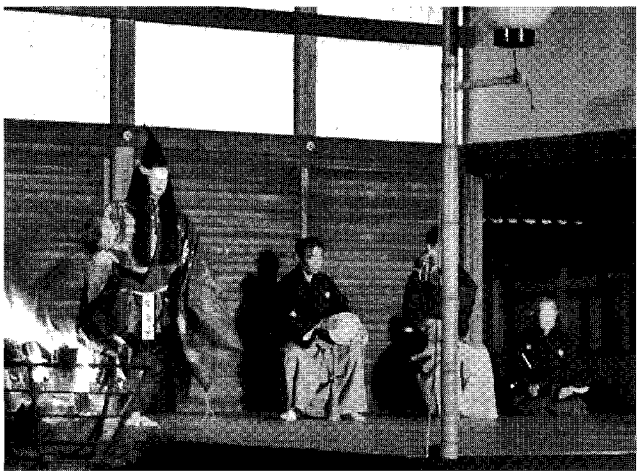
能「小袖曽我」佐々木多門　大島輝久 (2010.4.18)

能「国栖」後シテ 大島政允 (2010.6.20)

能「国栖」前シテ 大島政允 (2010.6.20)

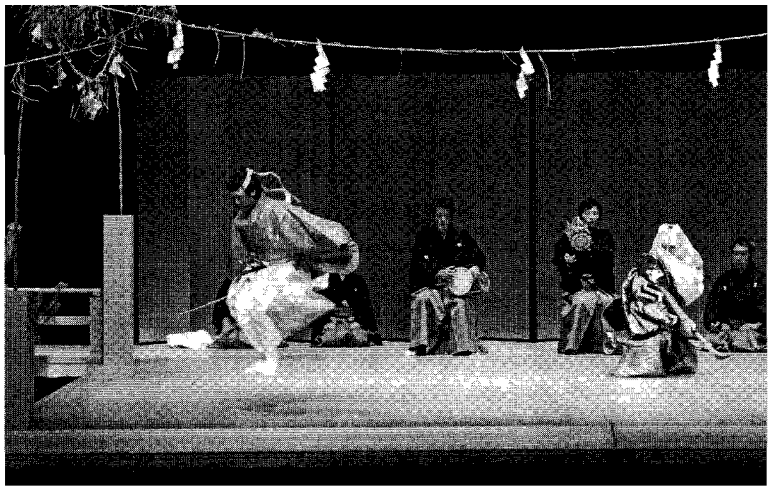
この夏の薪能三景色

能「八島」大島政允　福山八幡宮（2010.7.28）



能「敦盛」後シテ 大島輝久

能「敦盛」前シテ 大島政允　三和の森光信寺（2010.8.8）



能「橋弁慶」大島政允 子方 矢井田覚　岡山市民会館（2010.8.9）　撮影 蜂谷秀人

〈 演能ご案内 〉

2010年

開催日	催し名	開演	会場	鑑賞料	演目
9月 9日(日)	緑桜会　こころみの会	18:00	梅若能楽学院会館	前売り券 5,000円	舞囃子「松　風」　大島衣恵
9月12日(日)	第44回　彦根城能	16:00	彦根城博物館 能舞台	正面席 5,500円 脇正面席 5,000円	能　「経　政」烏手　大島政允 狂言「文相撲」　松田高義 能　「紅葉狩」　出雲康雅
9月19日(日)	第222回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能　「俊成忠度」　松井　彬 狂言「盆　山」　茂山千五郎 能　「　砧　」　大島政允
10月17日(日)	福山総合文化祭秋の会	10:30	喜多流大島能楽堂	無　料	仕舞・素謡
10月31日(日)	大島久見七回忌追善能	13:00	東京喜多能楽堂	指定席 12,000~6,000円 自由席 3,000円	能　「景　清」　大島政允 狂言「泣　尼」　野村万作 能　「道成寺」　大島輝久
11月 7日(日)	第25回　国民文化祭 能・狂言フェスティバル	• 9:30 •17:30	笠岡文化センター	• 要整理券 • 入場料 500円	• 仕舞・素謡 • 能「殺生石」　大島政允
11月 9日(火)	はじめての能楽大会	13:00	岡山後楽園能舞台	無　料	能学習発表・鑑賞会
11月21日(日)	第223回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能　「鉢　木」　長田　驥 狂言「金藤左衛門」茂山千五郎 能　「黒　塚」　大島衣恵
11月23日(日)	広島大島会	11:00	アステールプラザ 能舞台	無　料	能・舞囃子・仕舞・素謡
11月28日(日)	喜多流職分自主公演	11:45	東京喜多能楽堂	一般券 6,000円	能　「鬼界島」　大島政允

2011年

開催日	催名	開演	会場	鑑賞料	演目
1月 3日(月)	新春能楽祭	12:00	沼名前神社能舞台	無　料	奉納 仕舞・素謡　大島政允
1月16日(日)	喜多流新年初謡会	10:00	喜多流大島能楽堂	無　料	仕舞・素謡
2月27日(日)	喜多流職分自主公演	11:45	東京喜多能楽堂	一般券 6,000円	能　「綾　鼓」　大島政允
3月27日(日)	喜多流職分自主公演	11:45	東京喜多能楽堂	一般券 6,000円	能　「源氏供養」　大島輝久
4月17日(日)	第224回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能　「月宮殿」　金子匡一 能　「千　寿」　大島衣恵
5月15日(日)	喜多流春の会	10:00	喜多流大島能楽堂	無　料	能・舞囃子・仕舞・素謡
6月19日(日)	第225回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能　「隅田川」　大島政允
7月28日(木)	福山八幡宮薪能	18:30	福山八幡宮	未　定	未　定
8月 7日(日)	三和の森光信寺薪能	18:30	光信寺	未　定	未　定
9月18日(日)	第226回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能　「枕慈童」　大島衣恵 能　「熊　坂」　大島輝久
10月16日(日)	福山総合文化祭秋の会	10:30	喜多流大島能楽堂	無　料	仕舞・素謡
11月20日(日)	第227回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能　「花　筐」　大島政允 能　「雷　電」　松井　彬

喜多流大島能楽堂
〒720-0814
広島県福山市光南町2-2-2
TEL 084-923-2633
FAX 084-923-8730
http://www.noh-oshima.com

編集デスクより

猛暑の夏休み、大島能楽堂へ能学習に来てくれました府中市立国府小学校6年生の俳句から秋への元気を頂きましたので、ご紹介します。(Y.O)

能練習　しびれのぶんだけ　上達し
能楽堂　暑さも忘れ　一目惚れ
暑い夏　それより熱い　思いかな